

Title	医薬品製造企業の改善活動のマネジメント-S社を事例として-
Sub Title	
Author	青木, 晴夫(Aoki, Haruo) 河野, 宏和
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2008
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2008年度経営学 第2284号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002008-2284

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	河野 研究会	学籍番号	80730022	氏名	青木 晴夫
(論文題名)					
医薬品製造企業の改善活動のマネジメント - S社を事例として -					
(内容の要旨)					
<p>筆者が在籍する医薬品製造企業S社では、高品質な医薬品を安定供給することを目指し、品質の維持・改善、生産性の向上に積極的に取り組んでいる。しかし、2007年度は、安定生産及び安定供給の実現を目的に改善活動を実施したものの、目標を達成できない項目や、前年度よりも悪化した項目も認められた。そこで、S社の改善活動はなぜ上手くいっていないのか、上手くいっていない原因(問題点)は何なのか、どのようにすれば上手くいくのか、を考察したいと考えた。</p> <p>このような問題意識のもと、本研究の目的は、第1にS社の改善活動の状況を正しく把握すること、第2にS社の改善活動が上手くいっていない原因(問題点)を明らかにすること、第3に明確となった問題点を取り除くことにより、S社の改善活動がスムーズに進むような対応案を立案することである。</p> <p>具体的なアプローチとして、改善活動において作成されている複数の関係書類において、空欄が多く認められ、また、書類間でダブっている項目や不足項目があり、記載されている内容に一貫性がないことから、これらの関係書類に着目し、分析している。分析にあたっては、これらの関係書類を網羅的に精査し、疑問点を抽出した後、それらの疑問点のベースとなる事実が生じた原因を想定している。以上の分析の後に、インタビュー・フィールドワークを行い、原因(問題点)の明確化を行っている。そして、明確となった原因(問題点)を除去する対応案を立案している。</p> <p>以上のアプローチの結果、関係書類に記載されている情報が正確でない原因として、関係書類作成工程で情報の誤記、未更新等が生じていることが判った。そして、その背後には、責任者が作成者を十分に管理できていないこと、更に、責任者と作成者の間で目的を共有化していないという、全組織で共通している問題が判明した。</p> <p>また、組織別では、トラブルに対する原因究明・再発防止の対応が遅い部署や、対応は行っているものの、関係書類の情報を更新していないという組織内の問題、そして記載内容について部門ごとに決定しているという部門間の連携の問題も判明した。</p> <p>見出された問題の内、関係者へのトラブル情報の伝達を正確にするため、関係書類の作成工程を削減すること及び関係書類を集約することにより、関係書類に関する問題点を除去する対応案を立案した。また、改善活動の評価項目及びその目標値を変更することで、従業員にやるべきことを直観的に判りやすくし、早急な再発防止対応とそれに伴う技術の習得、及びトラブルを隠すリスクを軽減する対応案を立案した。更に、全組織で共通している問題背景は、長い時間をかけて醸成された文化であることから、地道に責任者及び従業員に教育研修を行うという対応案を立案した。</p> <p>本研究の成果は、第1にS社へ対応案を明示することで、改善活動がスムーズに進み、結果的に高品質及び低コストにつながる基盤作りに貢献できる。第2に、複雑な問題構造に対して、表面の問題だけでなく、その背後にある問題も見出すことができるアプローチを示すことができた。このアプローチは、S社の他の問題、延いては他社における問題に対しても応用することが可能である。そのアプローチの特徴は、安易にインタビューやフィールドワークを行うのではなく、書類上で網羅的に疑問点を抽出し、それらの疑問点を生み出した事実を丹念に想定し、その後にインタビューとフィールドワークを行っている点にある。そのことにより、筆者自身の問題意識を深めると共に、インタビューやフィールドワークで発見されたことの背後にある事象を想定することが可能となっている。1つの疑問点から深く掘り下げて原因系を考察している点が、本研究の最大の特徴である。</p>					